

同郷の画家 ふたりは友達

丸木位里
と
佐々木邦彦

同郷の画家

ふたりは友達

丸木位里と佐々木邦彦

2024年2月29日印刷

執筆・編集 広島大学教育学部造形芸術系コース学生有志

表紙・裏表紙、p.3, p.4: 市原風紗、p.1, p.2, p.13, p.14: 大谷七海、
p.3, p.4, マンガ: 佐々木里菜、柴田彩花、p.5, p.6: 堀部美有、
p.7, p.8: 江村健真、p.9~p.12: 新宅麻由、原田真日瑠
監修: 多田羅多起子

この冊子は2023年度広島大学地域の元気応援
プロジェクト採択事業「丸木位里と故郷・飯室
をつなぐプロジェクト—芸術と平和のまち・飯
室の未来に向けて—」の一環として作成したも
のです。

地域の元気応援プロジェクトについてはこちらから▲



佐々木邦彦 年譜

丸木位里 年譜

代表作《原爆の図》シリーズを妻の赤松俊子（丸木俊）とともに制作し、数多くの平和を訴える作品を遺した丸木位里は、水墨画を得意とした飯室（広島市安佐北区）出身の画家です。そんな彼の周りには、丸木スマ、大道あや、中谷ミユキ、佐々木邦彦など、同じく飯室と関係がある優れた芸術家がありました。

本冊子の前半では、位里の人柄がうかがえる安佐北区民文化センターの絵画彫刻展での逸話や、山描き・佐々木邦彦の絵画と詩作についてご紹介します。彼らの作品は、現在でも飯室の各所で見ることができます。後半では、この先も作品の価値を守り紡いでいくために発足した、「丸木位里と故郷・飯室をつなぐプロジェクト」の活動についてもご紹介します。



佐々木邦彦《暁岳》1960年 京都秀作展出品（個人蔵）簡瀬福祉センターにて展示中

- 飯室にて誕生 1908
- 絵を描くため京都へ 1928
- 川端龍子に師事 1934
- 青龍社展初入選 1939
- 徳之島守備隊作戦室配属 1944
- 沖縄で除隊 1945
- 本格的に山を描きはじめる 1950
- 詩集『ケロイドの頬』刊行 1952
- 《明けゆく甲斐駒》(1953年 青龍社 展出品作) を飯室小学校に寄贈 1955
- 依頼を受け、清和中学校校歌作詞 1962
- 死去 1972

- 1901 飯室にて誕生
- 同郷で交流のある中丸雪生と中谷ミユキの影響もあり画家を志す
- 1941 赤松俊子（のちの丸木俊）と結婚
- 1945 原爆投下を聞きつけ 広島に一時帰省
- 1950 《原爆の図》第一部「幽霊」発表
- 1967 埼玉県東松山市に 原爆の図丸木美術館を開く
- 1983 安佐北区民文化センターで「地元 芸術家絵画・彫刻展」に26点出品 オープニングセレモニーで同センター和室の襖に《松竹梅図》描く
- 1995 死去



丸木位里や赤松俊子（丸木俊）、佐々木邦彦らの寄書（1951年）

佐々木邦彦が生前に遺したスケッチ作品の一部 山を中心とした風景画や植物画を描いていました



佐々木邦彦に関する資料提供、作品画像掲載については、佐々木英六様に多大な協力をいただきました。
参考文献：『墨は流すもの—丸木位里の宇宙—』、丸木位里展実行委員会、2020年。色紙、スケッチ：個人蔵

地元芸術家 絵画・彫刻展

位里とポスター



マンガ制作：佐々木里菜

1983年に安佐北区民文化センターが開館しました。開館記念として、地元（てんらんかい）の画家である丸木位里の展覧会が企画されました。位里にこの話をもちかけたところ、自分1人の展覧会ではなく他の飯室の芸術家である中谷ミユキ、佐々木邦彦、丸木スマを取り上げてほしいという要望（ようぼう）がありました。最終的にはこの3人の画家と位里の特別出品という形で、4人の展覧会開催（つな）に繋がりました。

展覧会ポスターのお話

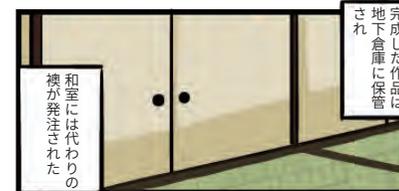
展覧会（じゆんひ）の準備のために担当者（たんとうしや）が東松山の位里の家を訪れたとき、位里に展覧会のポスターの絵を描いてもらうことになりました。担当者は広島に帰る電車の時刻が決まっていたため焦っていましたが、位里はマイペースな人であったため、すぐには描いてくれませんでした。やっと描いてもらったと思えば、乾くまで待てと言われ、やっと乾いたと思えば、印（お）を捺さないと言われ、意味がないと言われてまた待ちました。ポスターの絵は文化センター（がいかん）の外観を描いたものでした。

ロビーの襖絵のお話

展覧会の会期中、3日ほど安佐北区民文化センターに滞在していた位里は、ロビーでお客さんと話をしたり、控室（ひかえしつ）である和室で休んだりしていました。ある時、和室で昼寝をしていた位里は目を覚ますと急に「墨（すみ）をすってくれ」「襖（ふすま）を外してくれんか」と言い、すててこを履いた状態（しふつ）で私物の筆と墨を使い襖（ふすま）に絵を描き始めました。

外出して一連の流れを知らなかった館長（とつぜん）は、突然現れた位里の絵を見て「これは大変貴重なものだ」と言い、保管する専用の箱（はこ）を作らせて地下の倉庫に持っていった後、和室に代わりの襖（ふすま）を発注しました。今、この襖はロビーで展示されています。

位里と襖の絵



マンガ制作：栗田彩花



襖絵を描く位里



挨拶をする位里



実際に制作されたポスター

p.3-4に収録したエピソードについては、当時の担当者：八尾一雄様から情報をお寄せいただきました。マンガはいただいた情報を元に構成しています。

取材協力、画像提供：安佐北区民文化センター

画家 佐々木邦彦

『佐々木山』

幼少期から山好きだった佐々木邦彦は、山を多く描いたイタリアの画家・セガ
ンティーニの作品に出会い、山を描いてみたいという思いを募らせるようになり
ました。彼を追いかけていたはずが、いつしか山歩きに夢中になり、画家として
の自分なりの山、「佐々木山」を描くために登るようになりました。山歩きを通
して、「山のもつ非情さ、きびしさ、けわしさ、はげしさ、冷たさむなしさ」を
知る邦彦の作品には、なだらかなあたたかさというより、ずっしりとした重量あ
ふれる山が多く描かれています。山歩きのスケッチを見ると山の外観だけにとら
われず、「佐々木山」を描き求めていた邦彦の言葉がよく伝わります。



色紙とスケッチ

スケッチでよく観察された山の稜線が生かされています



中国新聞掲載

中国山脈のスケッチ

邦彦は 20 代で京都に出た後、30 代で東京の日本
画家、川端龍子に師事するまで独学とされています。
京都の中堅画家になってからも、飯室には支援者で
あった中丸雪生がいたため、多くの手紙が送られま
した。かつて飯室の三羽ガラスと言われた位里とは
日本アルプスに写生旅行しに行く仲でした。また、
中丸雪生に、位里や中谷ミユキを含めた 3 人展の開
催を提案したりもしています。少なくとも邦彦は、
位里と俊、位里の母であるスマ、ミユキらの作品と
並んで八丁堀の福屋に展示した経験が 2 回あります。



「郷土出身作家による美術展」案内状

参考文献：永井明生編『中丸雪生と交友の画家たち』泉美術館、2023 年

佐々木邦彦「山と私」『京都府ギャラリーニュース』6 号、1962 年 3 月

色紙・スケッチ：個人蔵 スクラップブック（個人蔵）所収の新聞記事『中国新聞』『芸芸』

展覧会案内状：広島県・広島市教育委員会、中国新聞社主催『郷土出身作家による美術展』八丁堀福屋 6 階催場、1955 年 4 月 12 日～17 日

邦彦と「会場芸術」

邦彦は、日本画団体・青龍社に所属していました。主催者である川端龍子の「会
場芸術」という理念は、青龍社に強い影響を与えています。その特長は、大きな
画面で人目をひく作風、美術の大衆化を目指す運営にあります。

会場芸術とされた作品は大画面に大胆な色彩、激しい筆の動きを持ち、青龍社
の作品に多く見られました。床の間に飾る小さな日本画に対抗する会場芸術は、
革新的なものとして注目を集めました。また、展覧会場を美術館ではなく、百貨
店にすることで美術と人々の距離を縮めようとした。

そんな「青龍社の中でも一番龍子画伯の色に染まら」ないとされていたのが
佐々木邦彦です。邦彦が入った頃は龍子の独裁色が強くなる時期でした。たと
えば丸木位里は、龍子よりも大きい作品を描いたことで龍子に叱られ、社を脱退し
たそうです。邦彦も青龍社の方針に賛同しかねて脱退を考えますが、もう一度自
身の絵の本質を研究するために、残留を決めました。この邦彦の様々な局面は、
飯室の中丸雪生への手紙につづられています。



会場芸術の大作主義である前に、邦彦の描く山は、独自の近
代的な画風のものとして評価されていました。清和中学校にあ
る《磐梯》は明治に噴火経験を持つ、福島県の磐梯山を指します。
大画面を持ち味とする会場芸術の傾向がみとれますが、噴火
を偲ばせる寂寞とした色彩で表
現されています。

昭和三五年（一九六〇）の
第三回青龍社展の出品作で
あり、「古代朱」が描く山の
稜線や岩の輪郭が注目され、
詩的な描線であるとも評価さ
れています。また、朱主体の
画面の場合、空は金箔に彩ら
れることが一般的ですが、邦
彦は空を絵の具で描きまし
た。このことより、伝統的な
日本画から新しい表現を試み
る作品と捉えられています。

「詩をつくり、山を愛するこの作家しか出
せない持ち味の絵であらう。」新聞美術評

参考文献：永井明生編『中丸雪生と交友の画家たち』泉美術館、2023 年

長嶋圭哉「青龍社と「会場芸術」」東京文化財研究所企画情報部編『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』中央公論美術出版、2009 年、pp.273-293

水澤澄夫「丸木位里」座右宝刊行会編『現代日本美術全集』第 10 巻、角川書店、1956 年、p.52

スクラップブック（個人蔵）所収の新聞記事（「テレビ」佐々木邦彦氏）『京都新聞』（「美術の窓 磐梯=佐々木邦彦」）

詩人 佐々木邦彦

詩人としての道

1) 「京洛画人抄 詩もこ
なす心底の山男」京都新
聞 1960年 11月 8日

2) 佐々木邦彦『コルボウ
シリーズ 9 ケロイドの
頬』文童社、1952年

3) スクラップブック（個
人蔵）所収の記事 「詩と
人 佐々木邦彦 絵画と
詩は根底で共通」京都新
聞第 30440号

4) 松島甲子芳「近刊詩集
抄」『新詩人』第7巻3月
号（第74集）1952年3月、
p.2

5) 永井明生「芸術の種を
まいた人—中丸雪生につ
いて」『中丸雪生と交友の
画家たち』展図録、泉美
術館、2023年、p.10

6) スクラップブック（個
人蔵）所収の記事 「詩
の教室”は定員の倍 二
年目迎えた”京都労働学
校”」1958年

7) 「市民と結ぶ詩運動
グループ『骨』同人 映
画館幕間に朗読会」毎日
新聞 1957年 6月 1日

8) 井上多喜三郎ほか「邦
彦 画伯の profile」『骨』
第 18号、1961年 3月、
pp.28-32

日本画家として活躍した佐々木邦彦は、詩の創作に
励む文学者でもありました。

若い頃から文学青年であった邦彦は、京都に出てか
ら『魚紋』などの俳句雑誌に作品を投稿したり、「コ
ルボウ詩話会」や「骨」といったグループに所属した
りし、精力的に詩活動に取り組みました¹。「コルボウ
詩話会」にいた時には、自身の詩集『ケロイドの頬』²
を出版しています。

「詩は心のつぶやき」³だと語る邦彦の作品には、機
械や建築などの人間の労働生活に対する虚無感を漂わ
せるものが多くあり、「アンヒューマニティに対する
消極的なレジスタンスが感取出来る」⁴などと評価され
ました。

また、後に自身の故郷・飯室にある清和中学校の校
歌の作詞も行なうなど⁵、詩人としても清和中学校との強
い結び付きがあります（p.9-p.12 参照）。

仲間とともに

「骨」の仲間たちとは毎月例会を開いて詩について
議論を深めていた他、雑誌『骨』を刊行し、詩を发表
したり、互いの作品を評価し合ったりするなど切磋琢
磨しました。また、彼らとは詩の教室⁶や朗読会⁷など、
市民への詩の普及活動にも取り組んでいました。

邦彦は、「骨」の仲間から、「とても静かな人」、山
男の頑丈な「体に不釣り合いに神経は繊細でシャープ」、
「誠実で几帳面」という印象を持たれていたようです⁸。
邦彦の詩の表現にも、そうした側面が影響していたの
かもしれません。

詩集『ケロイドの頬』 —故郷・ヒロシマを想う

本書は 16 編の散文詩⁹が収録された邦彦の詩集です。
口絵・装画は同郷の画家・丸木位里の妻である赤松俊
子（丸木俊）作。〈八月六日〉と題された口絵には、丸
木夫妻の共同制作《原爆の図》を思わせる人々の姿と
炎が描かれています。

タイトルの「ケロイドの頬」は、冒頭に収められた
詩のことで、広島原爆被害に対する哀惜の念が詠わ
れています。「墓標の街〈ひろしま〉にて」という副題
が添えられたこの詩には、「僕にはあの日の悲劇がわか
らない」¹⁰と書かれており、邦彦が原爆投下後に広島を
訪れたことがうかがえます。原爆被害の悲惨さを目の
当たりにした邦彦の故郷への想いが直に伝わる作品で
す。

飯室八景の歌

同じく邦彦が故郷を詠った詩に、「飯室八景の歌」が
あります。邦彦をはじめ、位里や中谷ミユキなど、同
郷の画家を精神的にも経済的にも支えた中丸雪生が選
定した飯室の 8 つの名所について、即興的に詠んだ歌
です¹¹。

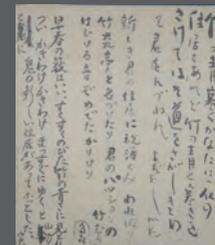
数多くの山岳風景を描いてきた邦彦の目に故郷・飯
室の風景がどのように映ったのかを、ぜひ実際の飯室
の空気とともに味わってください。



①



②



③



佐々木邦彦『ケロイドの
頬：佐々木邦彦詩集』コ
ルボウシリーズ 9、文童
社、1952年
（掲載画像は京都府立図
書館所蔵本）

9) 散文詩とは、俳句にお
ける 5・7・5 などの語数や、
韻律などの形にとらわれ
ず、自由な形式で書かれ
た詩のこと。

10) 佐々木邦彦、前掲書、
p.12

11) 永井明生、前掲書、
p.10

①邦彦による「骨」口ゴ
（『骨』1号、1953年）②邦
彦は『骨』に絵と詩を寄せ
た（『骨』2号、1953年）③「骨」
の仲間が邦彦の新居を訪れ
た際に詠んだ詩。左から、
山前実治、井上多喜三郎、
依田義賢の作。（個人蔵）

佐々木邦彦と清和中学校

このページでは、広島市立清和中学校3年生の生徒の皆さんが鑑賞した作品とその作品に対する気づきをピックアップしてまとめています。

光る銀山

太陽に照らされる雪

心がしぼんでいるから作品が小さい

雨が降ってそう

山の壮大さ

山が主人公

山が広がっている感じ

銀箔が使われている

白いところがキラキラ

雪が日光の反射で光っている

作者の悲しい気持ち

もやもやをきりて表している

銀の山 暗い過去

もうそろ冬。

湖のほとりて紅茶を一口

くすんだ金の山

木がかれてそう

景色がぼやけてる

霜が張ってる

季節は秋なのかな

秋から冬に移り変わっているのかな

ブルーシートピクニック

青い部分は川?

色が落ち着いている

太陽が出ていないから水の色が暗い

手前と奥で暗さがちがう

人気がなくどこか寂しそう...

山の前に木があるので山奥にみえる

日本らしさがない

ヨーロッパらへん?!

絵の具が上品にキラキラ

全体的に青色が多い

沈んだ色 物悲しい

霧?雲?雪?

この白い〇〇は何? 臨場感のようなものが生まれてよりリアルになる

遠くにもある荒々しい山の壮大さ

力強い山

淡い山

近くにあるぼんやり淡い

快晴

他の山から描いてる?

協力：広島市立清和中学校（3年生の皆さん、美術科・山口恵先生）、安佐公民館

飯室にある清和中学校には、佐々木邦彦の作品が多く展示されています。2023年11月20日、「地域に発信！！佐々木邦彦作品の魅力」という題材名のもと、大学生チームが清和中学校にて3年生2クラスを対象に出前授業をおこないました。授業では、まず班ごとに選んだ1つの作品を見て気づいたことを付箋に記入したり、意見を班内で共有しながら、じっくり作品鑑賞を行いました。

海 朝5時の山

なめらかな風が常に吹いている

筆やハケを使い分けているのかも...?

青統一でありながら空、山、浜、海と見分けられる美しい色合い

さらさらしてそう

刷毛目で風や雲の動きを感じる

見ている人が乗り物などで常に動いている

山がさんかく

三角構図

自然と山に目が行く

ところどころに金山の中に色々な色があった

窓の外に広がる静かな湖

絵の具 青色

冷たく悲しい

涼しげ

高く壮大な山 訪れる冬

金属色の山 標高が高い 早朝

全体的に青色が多い

沈んだ色 物悲しい

霧?雲?雪?

この白い〇〇は何? 臨場感のようなものが生まれてよりリアルになる

冷たくそびえ立つ山肌

遠くにもある荒々しい山の壮大さ

力強い山

淡い山

近くにあるぼんやり淡い

快晴

他の山から描いてる?

その後、班内で出たたくさんの意見をもとに、その作品の魅力が地域の人に伝わるような工夫を考えながら掲示物を制作しました。生徒の皆さんにとって身近である佐々木邦彦の作品を間近でじっくりと鑑賞できる機会だったので、興味を持って活動に取り組んでくれました。完成した掲示物は安佐公民館で展示され、地域の方々に見ていただくことができました。

季節が変わる山

山の色が白い
雪が積もっているよう

人がいる盆地

冬っぽい
季節は？
手前が秋
奥が冬

2枚の紙で描かれている

誰がどのような感情を持って
見ているかを考えるとおもしろい

山の色が白い
雪が積もっているよう

山の色が青いから寒い印象

山が青いから寒い印象

奥の山
手前の山

落ち着いた気持ち
明るい色が多いから
暖かい印象

対比

季節の移り変わり

花畑に見える
ので春

暖かい
秋の昼間

どんな
季節？

恐竜の背中 細かく描かれた木

何に見えるか
選手権！

石がむき出しの山と
自然豊かな山

山が青いから寒い印象

奥の山
手前の山

落ち着いた気持ち
明るい色が多いから
暖かい印象

対比

季節の移り変わり

花畑に見える
ので春

暖かい
秋の昼間

どんな
季節？

佐々木邦彦の作品は飯室の地域に多く残されており、その中でも清和中学校には多くの作品が展示されています。地元の中学校に地元出身の画家の作品がこれだけたくさんあるというのは、とても貴重な環境だと思います。生徒の皆さんには今回の出前授業を通して、佐々木邦彦や彼の作品、そしてこの飯室地域について誇りを持ってもらうきっかけとなっていたら嬉しいです。

この山見覚えがない？

清和中の廊下から
見える山ににている

山の形がそっくり
3年の廊下から見る山

清和中に来た
時は絵と
比べて見て！

天気が悪そう
曇っている

空が灰色・
黒っぽい

湿度が高い
寒い日の朝方の山

季節が秋っぽい

山が
ほうじ茶色

怖そうな山

色が暗い作品

緑っぽいのが
にている
きりがかかっ
ているもの
にている

山が
ほうじ茶色

季節が秋っぽい

湿度が高い
寒い日の朝方の山

不思議な山を描いてみたよ

連なってる？

よく見たら…
山が3つ
あるかも！

奥にも山が
ありそう

濃い色
暗い色

不気味な山

寒いところにありそう
青と赤の組み合わせ

表面がざらざらしてる

丘から見て
描いている感じ？

地面or湖？

木とかじゃなくて
岩そう

でこぼこ
した山

芸術と平和を未来へつなぐ

丸木位里と故郷・飯室をつなぐプロジェクトは、丸木位里の作品が忘れられたり失われたりしていくことを危惧した飯室地域からの提案により2021年に発足したプロジェクトで、今年で3年目になります。

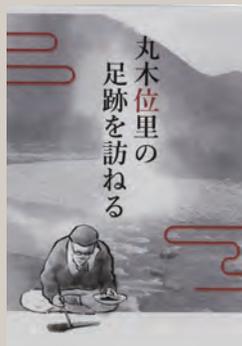
初年度は飯室にある位里の作品を調査し、講演会の実施と小冊子の作成をおこないました。2年目の昨年は地域を巻き込み「芸術と平和のまち」として、アートワークショップも開催しました。また、位里だけでなく、彼の周辺にいた飯室とゆかりのある画家（丸木スマ・大道あや・佐々木邦彦・中谷ミユキ）にも視点を広げて調査・報告をしました。3年目になる今年は、プロジェクトの一区切りとして飯室の芸術を未来に繋げるため、アートワークショップに加え、地元の児童館や中学校でもワークショップと授業をおこないました。その成果をまとめたのがこの冊子です。

飯室の誇るべき芸術家たちを、みなさんとこれからも大切にしていきたいという思いで本冊子を作成しました。ぜひこの先も、ときどきでかまいません。お手に取って地元の素晴らしい芸術に思いを馳せていただくと幸いです。

これまでの活動

2021

2022



飯室にある丸木位里の作品を調査。成果をパネルと小冊子で発表。



調査、発表のほかに、8月6日にはアートイベントを開催。



2023

児童館でのワークショップ

2023年度は、本冊子で取り上げている清和中学校での授業のほかにも、飯室小学校の児童館で丸木スマの画法である「押し葉」を追体験するワークショップを8月4日に開催しました。「押し葉」は、絵を描きはじめての当時の、筆を使うことに慣れていなかった丸木スマが用いた、絵の具をつけた葉を紙に押し付けるという画法です。その画法を用いて、参加児童32人で4本の大きな樹を作り上げることができました。



制作中の様子。葉だけでなく、野菜や木の実に、エアクレヨンなど色々な素材で葉っぱを拓きました。

8月6日のアートイベント「ミライへ」では、この作品を駅舎カフェromui(旧安芸飯室駅)に展示し、来場者に樹の根っことして、コメントカードを書いていただきました。イベントを終えた後も児童館、そして安佐公民館で展示された作品はよりたくさんの方々のコメントを身に付けて来場者である地域の方々や未来を担う児童たちをつなぐ大きな作品となりました。

寄せられたコメント(抜粋)

- ・みんなの元気が伝わってきます。この木のように、このまま真っすぐに育ってね!
- ・いろいろな色や野菜のスタンプで、とてもかわいく素敵です。見ていて元気がでます。



協力：広島市飯室児童館